

シヨウセンジシヨウ【名詮自性】「なはたいをあらはす」

萩原義雄識

小学館『日本国語大辞典』第二版に、意味説明を「名がその物の性質を表わすということ。名実の相応すること」と記述しています。此の語が仏教語であり、『仏教語辞典』には、典拠資料として、『成唯識論』巻二に見えている語としています。

近代文学作品資料には、

犬・犬士との縁を示す**名詮自性**である。・・・

○これらの命名は客観的にその人々の特徴を言い現したものだといえ、名は体をあらわすといわれる、いわゆる**名詮自性**とやらである。「新渡戸稲造『自警録』」

このとき「伏姫」の名は「人にして犬に従う」意の**名詮自性**であることが明らかにされる。「カニ・尺八」は「八房」の文字を解体再構成したものであり、**名詮自性**であることが作中で明らかにされる。

○水聲は中々激しくて、川といはうよりは瀧といつた方が好い位であり、成程「瀧」といふ地名も**名詮自性**であると首肯させた。「幸田露伴『華厳滝』」

八房のウメと房八夫婦と、また名詮自性の義です。滝沢馬琴『里見八犬伝』巻二より引用

○岩蔵は**名詮自性**、岩のようにいかつい体の、ぎらぎらと脂切った五十男で、ふだんはおよそ人臭いとも思わぬ人物だが、今夜はさすがに眼つきもとがりきっている。「横溝正史『魔女の唇』」

○それでもまだゴリラは息苦しさをおさえきれないのか、バリバリとワイシャツのボタンをひきむしると、下に着たアンダー・シャツの胸もとに、**名詮自性**ゴリラのようにくろくろと密生した毛が物凄いい。「横溝正史『金田一耕助ファイル15悪魔の寵児』」

○おそらく七斗という**名詮自性**、一夜に百人の女を御するに足る超人的な精血の貯水の所有者でなかったら、捨兵衛は般若寺風伯の二の舞いをふんだに相違ない。「山田風太郎『忍法帖5くノ一忍法帖』」

ともに**名詮自性**で、八房の犬・富山に因がある。滝沢馬琴『里見八犬伝』巻二より引用作中、**名詮自性**として明らかにされる。

このとき、狸の古名「玉面」が玉梓と通じる**名詮自性**が明かされ、里見の子孫を「畜生道」に導くとした玉梓の怨念によるものと理解される。

○阿修羅はいまや名詮自性、文字どおり阿修羅であり、悪鬼であり、鬼神であった。『横溝正史』『金田一耕助ファイル 19 悪霊島』下

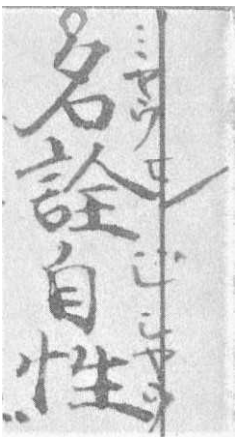
《補助資料》

小学館『日本国語大辞典』第二版

みょうせん・じしょう「ミヤウセンジシャウ」【名詮自性・名詮自称（シヨウ）】（名）仏語。

名がその物の性質を表わすということ。名実の相応すること。みょうせん。*太平記（一四〇後）二九・光明寺合戦事「將軍は引尾に陣を取り、師直は泣尾に陣を取る。名詮自性（ミヤウセンジシャウ）の理、寄手の為に、何れも忌々しくこそ聞へけれ」*御伽草子・鴉鷲合戦物語（室町中）「堂たうをかためてはさん米をひろひ、市町をめぐりては菓子をあらす。まことにこれ名詮自性の黒賊なり」*随筆・戴恩記（一六四四（正保元）頃）下「又臨江斎と申は、江にのぞむと書たれば、一生の間に、所もこそおほきに、此江州へなかされ給ふ。名詮自性のことはり、掲焉（けちえん）ならずや」*星座（一九二二（大正一一））〈有島武郎〉「早稲田といふ所は田圃の多いところだ。名詮自称だ」【辞書】下学・伊京・明応・天正・易林・書言・言海【表記】【名詮自性】下学・伊京・明応・天正・易林・書言・言海

古写本『下學集』村口本



春良本『下學集』



●名詮 ●自性

日本世話之義（言辭門一五九頁）

元和版『下學集』

○名詮自性（ミヤウセンジシャウ）（言辭門一五〇七）



『書言字考節用集』

○名詮自性（ミヤウセンジシャウ）見唯識論（言辭門八五二一）



○光明寺合戰事付師直恠異事

去程ニ八幡ヨリ石堂右馬權頭ヲ大将ニテ愛曾伊
勢守天野遠江守以下五千余騎ニテ書寫坂本へ
寄ントテ下向シケルカ書寫坂本へハ越後守カ大勢
ニテ著タル由ヲ聞テ播磨ノ光明寺ニ陣ヲ取テ尚八幡
へ勢ヲツケレケル將軍此由ヲ聞給テ光明寺ニ勢ヲ着

又前ニ先是ヲ打散サントテ同二月三日將軍書寫
坂本ヲ打立テ一萬餘騎ノ勢ヲ卒光明寺ノ四方ヲ
取卷給フ石堂城ヲ堅テ光明寺ニ籠ルカハ將軍ハ引
尾ニ陣ヲ取リ師直ハ泣尾ニ陣ヲトル名詮自性ノ理
寄手ノ為ニ何レモ忌々シクコソ聞ヘケレ同四日ヨリ

師直ハ泣尾(ナキイ)ニ陣ヲトル。名詮(ミヤウセン)自性ノ理(コトハリ)寄手ノ為ニ何れモ忌々(イマー)シクコソ聞ヘケケレ。